

り、又當時の遺老等に質して『湖東陶志』を編纂し、其後猶ほ熱心なる調査を繼續すること廿餘年にして此度それ等の業績を纏めて發表せられるに至つたのである。内容は總説、民窯湖東燒(絹屋窯)、藩窯湖東燒、民窯湖東燒(山口窯)、樂燒、民窯湖東土燒、民業赤繪湖東燒、藩窯圓山湖東燒、民窯圓山湖東燒、民窯長濱湖東燒、湖東燒職人の京都に於ての活動の十一章に年表及び索引を附し廿四葉の挿圖を添へてある。中にも藩窯湖東燒の章は本書の主要なる部分で、井伊直亮が湖東燒の優秀なものを作つて立派な國産を興さうとの趣旨から、民窯を藩窯として以來、代々の藩主が經營の困難なるにも拘はらず別して幕末政治家として有名な直弼が苦心慘澹他國産に劣らぬものにしやうと努力したこゝより、遂に藩窯を廢止するに至るまでの狀況を敘述してあつて頗る興趣を惹く其他の各章も藩窯となつた前後の事を述べてあつて、甞に鑑賞家蒐集家若しくは製陶家の參考となるばかりでなく、我國の藝術史産業史の研究者にこつても亦好個の參考となるものであり猶ほ直弼の趣味の半面を窺ふこゝも

出来るものである。(菊版三九四頁、湖東燒の研究出版後援會發行、價六・〇〇)【以上松野】

●郷土制度の研究

小野 武夫著

我國に於ける農政の沿革が兵制と相關る處は甚だ遠く且甚だ深く、時には兵制即ち農制であるやうに觀えた。徳川時代に至つては、所謂郷土は分布區域を局限されたけれども、近世社會史及び經濟史上に於ては可なり重要な役目を帯びて一方に於ては武士として待遇を受くる。共に他方に於ては地主としての經濟生活を營み以て郷村の中心となつたものである。本書はその郷土に關する制度を研究せんとし、主として徳川時代に於ける郷土の本質を明かにし、此制度が維新と共に廢滅した事情及び其後に於ける彼等の生活の一斑を叙し且つ現代社會に及ぼした影響を見やうとするのであるけれども、郷土制度の前身であつた兵農一途及びそれが分離するに至る推移をも知らんしたものである。従つて第一章を序論とし、その中に於て莊園制度と武士の發生、莊園の崩壊と兵農

の漸離を略叙し、兵農分離の原因を探究せんとした。第二章を本論とし徳川時代に於て郷士の出現する社會的並に經濟的事情を説き、郷士を其の特質によつて區分し戰闘員たる郷士及び非戰闘員たる郷士とし、その前者を更に特置郷士、救濟郷士に細別し、後者は舊族郷士及び登用郷士即ちこれであるとし、郷士と村落社會との關係を觀て維新に際會したる郷士制度の變遷を述べて居る。第三章に於ては、以上の記述を綜合觀察して、徳川幕府の政治思想は兵農分離を以て治國の要諦としたけれども、其の封建治下に於ける人民の統御は必ずしも一樣には行かない。それ故に此時代に於ける郷士出現の事情も區々であるけれども、大體から見て中世の農兵制度を其儘繼承したるもの、中絶したるを再興したるもの、軍役に出動せしめんがために特に採用したるもの、公共事業の勳功者を表彰の意味で郷士にしたもの及び家中の武士を農村に放ちて移住土着せしめたもの等がある。而して彼等は明治維新に於ては武士格たる社會的名譽を失ふたけれども、自作農たる特質は依然として保有した、めに、舊幕時代

に低級武士として蔑視せられたるに拘らず、維新後雖も新社會の一勢力となつたのであつて、此點に於て武士が流離轉變の生活を營んだことは大に差異がある事を指摘して居る。以上本文の外に追記「恒久郷士に就て」があり更に附するに三葉の口繪を以てして居る。其の所論にはや、首肯し難き點や、更に著者の説明を求めたき點一例へば中世の所謂「惡黨」郷士の因果關係、近世期の浪人郷士の關係の如きがないでもないが、私は此方面に對する唯一の纏つた書として、一般讀書子に推する客かなるものではない。(菊版二〇一頁、大岡山書店發行、價二・五〇)

●日本宗教史

土屋 詮著

本書は著者が往來早稻田大學の文學科及び歴史地理科の講義録に連載し、後ち單行本として刊行し當時既に數版を重ねたものであるが、更に訂正増補して重刊したものである。緒論に於て宗教及び宗教史を説明し、第一編上古史第二編中古史第三編近古史第四編近世史に大別し

前後十六章百五十五節に再別し、附するに神宮及び主なる官國幣社一覽、神道各教派管長及事務所、佛教各宗派總本山大本山及本山一覽、佛教各宗派檀家及信徒、基督教各派等の十項を以てし、建國以來關東大震災に至るまでの神儒佛耶の四教に關し各時代に於ける諸宗教の起原、教祖、教理、發達、儀式より、道德風俗政治教育に及ぼせる影響を明かにし、加ふるに祈禱、卜占、禁厭、祭典、會式等の俗信仰に至るまでの事實現象を網羅したるものなれども、特に奈良朝時代の六宗昌隆期の記述、近世に於ける神儒佛分離期に關する記述及び明治時代の宗教を説ける邊は注目に價する。(菊版七六六頁、價五・五〇、自修社發行)【以上中村】

●日本神話傳説の研究 高木 敏雄著

本書は故大阪高等學校教授文學士高木敏雄氏の遺稿中神話傳説に關するものを集録したものである、高木氏が我國神話學の開拓者としての功績はこゝに贅言するの要はあるまい、篇を分ちて神話、傳説、説話、童話の四

し、その中に日本神話學の建設、日本神話學の歴史的概観、素盞鳴尊神話に現れたる高天原要素と出雲要素、大國主神の神話、浦島傳説の研究、牛の神話傳説、説話學者としての瀧澤馬琴、日本説話の印度起源に關する疑問日韓共通の民間説話、人身御供論、英雄傳説桃太郎新論等の諸篇あり、其の研究方法にはもつと強く民族心理學に立脚し、且つ歴史的考證に重きをおいたら思はれる節もないではないが、何れにしても我古代史や、土俗學を學ばんとするものゝ必ず一度は眼を通しておかなければならぬものであらう。(菊版五七〇頁岡書院發兌、定價五・〇〇)【徳重】

●近代蒙古史研究

文學博士 矢野 仁一著

著者が近世支那の政治外交史に深造し卓拔着實なる識見を懷きて我が東洋史學界に擅長の命名を博せらるゝは周知のこゝに屬し、學者は勿論政治外交家より實業家に至るまで皆其の卓見を聞かむと欲して翹望するや久しい本書は十數年來燃犀の爛眼を以て潛心注意せられし近代